

この本を手にした時、始めは「カンブリア宮殿」をそのまま文章にしたものかなと思いました。

「まえがき」を読み始めると、『(略) みな、肝に銘じておくべきことがある。(略) 歯は、一度削れば、二度と再生しないし、一度抜けば二度と生えてこない。取り返しはつかない。だからこそ、歯医者選びは、慎重に慎重をかさねなければならぬ。』と始まり、現在の歯科の現状、問題提起。そこに、『「治療」から「予防」へ。虫歯を治すためではなく、虫歯にならないために行く場所へ。日本人の歯を守ることに命を懸ける。熊谷崇の「予防歯科」に密着した。』と続いていき、とても惹きつけられる始まりでした、そして、目次が終わると、エピソードが鮮やかな映像となって頭の中で走りはじめました。この辺がTVを作っている人だからかなと思う親しみやすさがありました。それでいて、様々な情報が、しっかりと盛り込まれていて、より多くの一般の方に読んでもらいたい本だと思いました。

富士通にラブコールのエピソードがおもしろかったです。また、患者さんの声では、メンテナンスを。「車の車検と同じで定期整備すればよい」とか、「自分にとってのリフレッシュで温泉に行くように楽しみなものであり、皆が美容室に行くのと一緒に」である等、メンテナンスがとても身近で、しかもとても重要であると、認識していることが伝わってくる場面もありました。

また、いつもならあまりスポットが当たらない各部署やスタッフルームでのお昼のひとときエピソードもあり、多角的でTVでは映らなかった様々な事がまともな文章の中に、例えば、専門医と言っても、日本と米国の専門医では、全く別物で、米国専門医、しかもボード認定医が3人も揃っているのは、日本はおろか、北東亜細亜でも日吉歯科だけであること。そして専門医がいる事で、治療の可能性が大きく広がる事も、うまくまとめられていました。

その中で、少し残念だったのが、技工室のエピソードです。最もベテラン(仮名)小島さんの話のポイントは、前半の「歯科医師たちと密に連携が取れます」というところに、密な連携が取れることで、院内の方がよりニーズに対応できる事。細かいディテールにも配慮しつつ、時には口腔内写真やレントゲン等も参考にしながら精度の高い物を提供できるというニュアンスをふくんだ会話だったと思うのですが、その後、すぐ後に続く竹田さんのコメントで「そういえば、

かぶせ物が合わず、急いで呼び相談していた」とむすばれてしまい、なんだかいつも合わないかぶせ物を作っている様な空気感を残すエピソードに思え、日頃皆、本当にていねいな仕事をしている分、残念でした。文章の後半には、精度の良い正確なものを作っている風景や、技工士の重要性も書いてくださっていますが、短い文章でまとめる事のむずかしさも感じました。そして、私達にもう少し技工の魅力や、どの様なケースのときチェアサイドと相談することがあるかなどを言葉数多く正確に伝えられる会話力があればよかったのになと思いました。

院長は常に相手に想いを伝え、常識の壁を破り、不可能と思えることを、次々と形にしていますが、今回のこの本のおかげで、36年の戦いの歴史と背景をより深く知ることが出来ました。若い日の先生方が、お金を出し合って海外から先生を呼び勉強していた事。また、予防に理解を示さない酒田の患者さんとの試行錯誤の歳月があるからこそ、院長の言葉にはあれだけの説得力があり、データが収まっている蔵に本当に重みがあることがわかりました。

ある日、新聞に出された企業広告のお客様のコンタクトセンターに電話をする。そんな院長の発想力と行動力が身を結び、世界基準の健康ファイルとして起動をはじめています。

歯科診療室から、総合的な健康ステーションへ。それにより歯科の価値を上げ、体の疾患の早期発見することはまた、患者のためにもなりながら、あらゆる医療費の抑制にもつながる。とても壮大なビジョンは、たくさんの方の参道を得て、歯科以外の企業の名前を耳にする事がおおくなってきました。

最近の院長の一步の幅が大きすぎ、内にいると、すごい事が多すぎて、よくわからないので、目の前の自分の仕事を精一杯がんばる事しかない、せまい世界で日々を送っていたように思います。

ですが、この本を読むことで、院長の目指す方向性を知る事ができました。なぜ、メンテナンスが必要なのか。歯を守るためには、ホームケアとプロフェッショナルケアの両方が大切である事など、歯についての情報も、よりしっかり伝わるよう書かれていて、とてもわかりやすいと感じました。

せっかくなら、竹田さんにも、メンテナンスを体験してもらい、感想を聞いてみたいと思いました。

今後益々発展してくだらう日吉歯科のスタッフの一員として、大きなビジョンを心の中に持ちながら、自分達ができる事を精一杯する事で、その発展に寄与できるのではないかと思います。

生涯にわたり、自分の歯で過ごすことができる。そのお手伝いをさせていただける事に誇りを持ち、日々の仕事に真摯に向き合っていきたいと思います。